

入中1年人権だより

徳島市 八万中学校
1年生 第20号
2021年1月1日
編集・頒 吉成正士

新年あけましておめでとうございます

1年生も残すところ、あと2ヶ月半となりました。残りわずかな時間、どうぞよろしくお祈りします。



さて私、年末の大そうじのあとにあった出来事が、何度も何度も脳裏に浮き出て仕方なかったので、記録してみることにしました。

12月22日。大そうじのあと。南校舎1階の北入り口あたりに、3年生の男子生徒数人が待ち構えるようにわらわらといました。何の気なしに通り過ぎようとする、そのうちの二人に、「先生」と呼び止められました。「あ、自分に用事があったのか」と思い立ち止まると、「さっきの時間、先生の話聞いてなくてすみませんでした」と。

その日の3時間目、彼らのクラスの数学の授業に行っていたときのことでした。プリント学習をしていたのですが、その合間にちょっとだけ、部落差別についての話をしました。私の教え子に実際に起きた、部落差別についての話です。プリント学習の時間ですから、「全員が聞いてなくてもいいや」くらいの、軽い気持ちで話していたのですが、話していくうちに、だんだん手を止め、顔を上げて聞いてくれる子が増えていくのが分かりました。でも片隅に、友達と話しながらプリント学習を続けている子がいることも知っていました。それが気になって、チラチラと目配せをしている子がいることも知っていました。それでも注意することはせず、気にせず話し続けました。

二人は、そのときのことを謝りに来たのです。周りには、連れ添ってきた子も数人いました。二人に注意を促したのかもしれませんが。瞬間、「立派だなあ」と思いました。私は本当に、心の底から気にしていなかったのですから。

私がこうやって人権だよりを書き始めたのが、かれこれ25年くらい前です。書き始めた当時は本当にひどいものでした。何がひどかったか

というと、私の心持ちがです。月2回程度発行していたのですが、それが、授業に行く教室の床に落ちてたり、靴で踏んだ跡があったり、ゴミ箱に捨てられてたりしていたのです。



頭にきました。

「なんでこんなに簡単に扱われるのか」と。人権だよりの中には、同級生の悩みや苦しい胸の内、その時々にあった出来事や、心揺さぶる資料を載せていたつもりでした。だから、ぞんざいに扱われることに腹を立てたのです。

でも、そのうち私自身が、その心持ちを変えていきました。

「腹を立てても何もいいことはない。それよりも、大切にしようと思えるような内容にしていこう。今まで

そうやってなかっただけじゃないか。それに、世の中はそんなあまいものじゃない。そもそも人権が受け入れられているなら、こんな人権だよりを出す必要なんかないはず。まだまだ受け入れられてないから出す必要があるのであって、いちいち腹を立てていても何のメリットもない。そのエネルギーは、もっと生産的なことに使おう。」

そう考えるようになっていったのです。

そう思うと、今回謝りに来た子たちの立派なこと。それを見逃さなかった友人たちの立派なこと。

大切な話を、聞いていそうで聞いてない子もいます。逆に、聞いてなさそうで心の眼でしっかりと受けとめている子もいます。私の話は聞いてなくても、別な場面で真剣なまなざしを送っていた子もいました。だから、私の話を聞くことだけがすべてじゃないと思っています。それは、日ごろからみなさんとしっかりやりとりしていれば見えてきます。だから、見かけだけに惑わせられないことが大切だと思っています。



昨年開かれた人権を語り合う中学生交流集会で、人種差別の話題が出たとき、ある他校の中学生がこんな発言をしてくれました。

Nさんの発表で、人種差別に近い話かなと思って聞いたんですけど、人種差別と部落差別ってちょっと似ているなと思ったんです。

私たちから見て、外国の人は同じ日本人よりも違う地域で育ってきた人なわけだから、ちょっと得体が知れないというか、その人のことを詳しく知らないから、分からないことに恐怖を覚えたり、ちょっと見てしまったりするのかなと思うんです。

部落の人たちも一緒に、当時差別をしていた人たちから見ると、部落はちょっと畏怖されていた、自分たちとは違う人みたいな感じで見られていたから、差別されていたのかなと思って。

私の(出身小学)校区の中に部落があったんですけど、当時は部落みたいなことを言われてなかったけど、今思えばそうだったんだろうなって。先生が部落差別の劇をしてくれたりだとか、地域の歴史学習みたいなので習ったことと照らし合わせてみたら部落だったんだろうなって感じなんです。でも、部落だった地域出身の子も、私の学年にいたんですけど、普通に友達だから、「うわ部落なんじゃ」みたいな感じじゃなくて、ふんみたいな感じだったんです。けど、やっぱりそれは知っていたからだし。

Nさんもクリフさん(仲良くしている黒人)のことを知っているから差別をしないというか、よく分かっているから、差別みたいな感じの考え方に繋がらないのかなと思うんで、相手のことを正しくちゃんと知ってるということが大事になってくるんじゃないかなと思いました。

人種差別を引き合いに出して、身近にあった部落との関わりについて話してくれました。私の頭にずっと残っていた発言でした。そして、「彼女の小学校の時の先生に知らせたいなあ」と思いました。当時の小学校の先生も、自分たちが教え伝えていることがちゃんと伝わっているのか、子どもたちにどう残っているのかわかって、やはり気になってると思うんですね。けど、こうやって、ちゃんと残ってるということが分かれば、それはやっぱり嬉しいんじゃないかと思うのです。

話したことや伝えたことが、どんなに伝わっているのか、残っているのか、それは相手に訊かなければ分かりません。大切なことが忘れられていたり、しょうもないことが覚えられていたりします。でも少なくともいえることは、頭だけで分かったことよりも、心で響いたことは、残り続けるということです。人権学習で必要なことは、そういうことのように思います。



昨年、女子テニスの大坂なおみ選手が大きくクローズアップされた出来事がありました。理不尽に命を奪われた黒人の名前をマスクに書いて、全米オープンの試合に登場し続けたことです。賛否両論がツイッターで飛び交いました。それでも彼女は「自分の問題」として、止めませんでした。そして、見事優勝。そのときのインタビュー。

テニスコートでインタビュアーは、こう問いかけました。

「当初から7試合で7枚のマスク、7人の名前(人種差別への抗議のため、1試合ごとに異なる黒人被害者の名前を記したマスクを着用)。なおみが発信したかったメッセージとは何ですか？」

みなさんならどう答えるでしょう？私も瞬間、ドキッとして、「自分ならどう答えるだろう」と考えました。多くの場合は、「質問に対する答え」を答えるのだと思います。けど、彼女はこう答えました。

「あなたはどんなメッセージを受け取りましたか？」

インタビュアーだから逃れられるというものではない。インタビュアーにすら、「自分の問題」と捉え、考えてほしかったのだと思います。

「今、話をしているあなたにも聞きたいの。これは私の問題ではあるけれど、みんなの問題であり、みんなの中にあなたも入っているの。だから、私に問うのではなく、いま私と話しているあなたは どう思ってるのか、それを聞かせほしい。」

そう、心の声が言っているように思えました。どんな非難を浴びても、自分の主張を貫こうとした一言だったと思います。



もう一つ、年末年始にキラッと光った出来事がありました。

昔からの友人から届いた年賀状。一言だけ、こう書いてありました。

「『ハチドリのひとつずく』って、知ってますか？」

この一言で、やはり、人権を語り合う中学生交流集会で聞かれた発言を思い出しました。

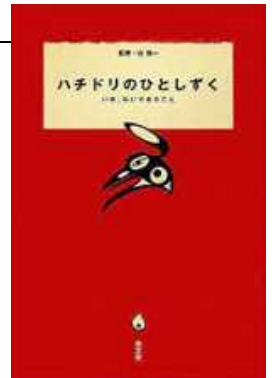
…思い出した話がある。

学校に来てくれた講師の先生が、何とかの何とかっていう、記憶力壊滅的すぎて題名覚えてないんですけど。

森があって小鳥ちゃんがいました。ぴよぴよ。火事が起こったんですよ。わーって。いろんな動物たち逃げだしました。でも小鳥ちゃんは水たまりか池から取ってきて、一滴燃えさかる炎の中に落としました。それでも無理やん。でも小鳥ちゃんはあきらめずに、わんさかわんさかかって水を炎の中に落としていったんですよ。そうしたら、確か他の動物たちもみんなで知恵を合わせようっていう、全員で水を運んで、火事が消えたっていうお話を思い出して、「あ、これわしらやん」と思って。

確かにコロナとか、顔の差別とか臓器提供とか、外国人差別とかなくならんかもしれないけど、私ら小鳥ちゃんたちがいっぱいおるけん、その小鳥ちゃんたち全員が他の人たちも感化して、たかが一滴かもしれないけど、されど一滴で、だんだん世界はよくなっていくんじゃないかなと、みんなの意見発表を見て思いました。頑張れ小鳥ちゃん。

「ハチドリのひとつずく」とは、南米のアンデス地方に伝わるお話だそうです。



森が燃えていました。

森の生きものたちは、われ先にと逃げていきました。

でもクリキンディという名のハチドリだけは、いったりきたり。

口ばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは火の上に落としていきます。

動物たちがそれを見て、

「そんなことをしていったい何になるんだ」と

いって笑います。

クリキンディはこう答えました。

「私は、私にできることをしているだけ」

辻 信一監修 光文社刊 2005年

中学生集会で発言した子は、恐らくこの物語を紹介したかったのだと思います。

人を変えるのは人です。大切な人との出会いのなかで、その人の思いを通して、人は変わっていきけるのだと思います。

学ぶことは大切です。けど、学んだことをどう生かすのか、何に生かすのか、その根っことして何を大切にしなければいけないのかを大切に持ち続けてほしいなと思います。テストが終われば試合終了ではありません。受験が終わって試合終了でもありません。一つのテスト、一つの受験で燃え尽きてしまうような学びではなく、たとえ小さくても、いつまでも、どこまでも燃やし続けられるような学びを、自分のものにしてほしいなと思います。



「ひとつずく」は、私たちです。